



Data

監督: エリック・ポッペ

出演: アンドレア・バーンツェン/
エリ・リアノン・ミュラー・
オズボーン/ジェニ・スベネ
ビク/アレクサンデル・ホル
メン/インゲボルグ・エネス
/ソロシュ・サダット/ブレ
ーデ・フリスタット/アー
ダ・アイト/カロリーヌ・シ
ャウ/タマンナ・アグニホー
トリ

■■ショートコメント■■

◆本作を鑑賞した前日の2019年3月15日、ニュージーランドのクライストチャーチで銃乱射事件が発生し、50名が死亡した。近時は、アメリカでも世界各地でもこのような銃乱射事件が頻発しているが、治安の良さと知られ、銃犯罪が少ないNZでもこんな事件が起きたことに世界中が衝撃を受けている。

◆その動機は宗教的なもの、政治的なものとさまざまだが、治安の安定した北欧の福祉国家として知られているノルウェー王国では、2011年7月22日の午後3時17分に、首都オスロの政府庁舎前で、駐車中の不審な白いワゴン車に積み込まれていた爆弾が爆発。続いて午後5時過ぎ、オスロから40キロ離れたウトヤ島で銃乱射事件が発生し、ノルウェー労働党青年部のサマーキャンプに参加していた十代の若者など69人が死亡した。本件は、その事件を“題材”とし、その衝撃の一部始終を、72分間ワンカットのリアルタイムで映画化したことを“売り”とした問題提起作だ。

◆カメラが焦点をあてて追うのは、妹のエミリア（エリ・リアノン・ミュラー・オズボーン）と共にキャンプに参加していた女の子カヤ（アンドレア・バーンツェン）。本作は、オスロの政府庁舎前で発生した爆弾テロ事件のため、携帯での連絡がなかなかとれない中、市庁舎にいるはずの母親を心配しながら出来の悪い妹（？）にお説教しているカヤの姿からスタートする。その数分後にいきなり数発の銃声が！こりゃ一体ナニ？そう思っていると、いきなり多くのキャンプ参加者たちが逃げ惑いはじめたから、ヤバイ。銃声は島のあちこちで何発も何発も！これは何かの訓練？私たちはどこに逃げればいいの？

◆そんな導入部は、かなり刺激的だ。カヤをはじめ、キャンプ参加者たちの演技もそれぞれ恐怖と困惑でいっぱい迫真のもの。しかし、本作ではカメラは一貫してカヤを追いかけるだけで、犯人を一切映さないから、どこで誰がどのように発砲しているのかがサッパリわからない。したがって、逆にカヤたちがどこをどのように逃げているのかもサッパリわからない。

さらに、当然ながら、カヤが逃げ回り、妹を捜し回らる中でいろいろな“エピソード”が登場するが、そのストーリー展開中はタイミングよく銃声が止んだり、そのエピソード”の展開に合わせてまた銃声が鳴りはじめたりするからアレレ……。そのため、少しずつバカバカしくなり、緊張感も少しずつ薄れていくことに……。

◆今ドキは、携帯という文明の利器があるから何かと便利だが、携帯音が鳴ったために隠れているところを犯人から発見されたら大変！他方、携帯があれば警察へ連絡できるし、警察や救助の様子が把握できるから、携帯は大切なツール。しかし、それよりも何よりも、小さな島の中で銃声に晒されている当の本人たちは、犯人（たち）がどこで何をしているのかを探り、何よりもその危険から逃れるためのベストの方策を立てるのが大切ではないの？それが、サバイバルのための第一歩ではないの？

私はそう思うのだが、カヤをはじめキャンプ参加者の若者たちの動きはどうも……？

◆私にとって、本作はそんなダラダラ感の中で結末を迎えたが、その結末はかなり意外なものだ。なぜ、カヤはあんな場所で都合良く探していた妹と再会できるの？また、何よりも犯人（たち）はどこから何を狙って銃を撃っているの？たまたまラストでは、救助船が島に近づき数名を救助していたが、あの船に銃を撃ち込まれたら救助員も含めて全員アウトになってしまうのでは？

◆とにかく、カヤの動きだけをカメラで追った本作の狙いは、私に言わせれば完全にナンセンス。だって、それでは何にもコトの真相に迫れないもの……。なお、冒頭と末尾の字幕では、この事件についての“解説”が流れるが、こんな映画の後ではそれもどこまで信用していいのか疑問に……？

2019（平成31）年3月19日記